

環境学習共催講座「ごみ問題から地球環境問題を考える」事業報告

講座名	ごみ問題から地球環境問題を考える		
日時	平成22年11月26日(金) 13:00~16:00		
場所	山口市リサイクルプラザ	参加者数	30
共催者	阿東・山口・小郡地域環境パートナーシップ会議		

1 スケジュール

13:00~13:05	集合、開会、あいさつ・講師紹介等
13:05~14:00	講義「ごみの適正処理とリサイクルについて」浮田正夫氏
14:10~15:00	リサイクルプラザ見学
15:10~16:00	講義「山口市のごみ事情」山口市資源循環推進課 田中主幹

2 活動内容

山口市リサイクルプラザにて、阿東・山口・小郡地域環境パートナーシップ会議の会員の方の司会進行のもと、代表の吉富崇子さんから挨拶があり、講師の紹介等が行われました。続いて講師の浮田正夫さんによる講義を受けたあと、リサイクルプラザ内の見学を行いました。その後、山口市資源循環推進課の田中主幹より、山口市のごみ処理の現状等についてお話を聞きました。

概要：ごみ分別等の現状を学び、ごみ問題から地球環境問題を考える。

【開会・あいさつ等】 山口市リサイクルプラザ2階和室



【講義】「ごみの適正処理とリサイクルについて」



山口大学名誉教授 浮田正夫先生より講義がありました。

<内容> 資料参照

ごみとは何か

一番大事なのは、「人間が作り出したものは、他の生きものたちに迷惑をかけないように、人間がきちんとリサイクルして、自然に返さなくてはならない」ということ。

日本、山口市、宇部市のごみ処理の現状

モノを作り、使うということを動脈部（動脈産業）モノを捨てて、リサイクルすることを静脈部（静脈産業）という。ある人が、「都市そのものは人族の排泄物である」と言った。動脈産業のほうは活発だが、静脈部は希薄。研究する人も少ない。家の中にあるものを軒先にすべて並べてみた写真がある。ブータンと日本の家庭のでは、日本の方がはるかに量が多いことが分かる。

日本のごみ処理の現状を見てみると、燃やせるものは燃やしているというのが日本の特徴である。焼却率は74.2%と高い。1人1日あたり1030gごみを出して、210g資源化しているということ。生ごみなどの水分量を減らせば、もっとリサイクル率はあがるはず。

山口市の現状を見ると、1人1日あたり1,177gのごみを出している。日本平均でいくと少し多い。山口市は事業系のごみの割合が多い。プラごみは1人1日20g出している。ペットボトル1本分くらいの重さ 山口県の特徴としては、焼却灰をセメント原料として利用していること。リサイクル率は高く、最終処分率が4%と非常に低く、優良。宇部市は山口市と比べるとごみの量は少ないものの、リサイクル率が約5%ほど低く、最終処分率は15.5%。

宇部市を例にして、問題点を考える

燃やせるごみを見ると、紙などが多く、食品のむだが多いことが分かる。また水分も多い。燃やせるごみを集めたパッカー車から落とされたごみを見てみると、段ボールなどの資源ごみが混ざっていることが分かる。プラスチック製容器包装ごみをしっかり分別した燃やせるごみはよく燃えないので補助燃料を追加する必要があり、その分コストがかかる。2008年2月に出されたプラスチック製容器包装ごみがリサイクル協会の判定で最低ランクのDになってしまったこともあり、補助燃料にもなるので、汚れたプラスチック製容器包装を燃やせるごみに出すことになって排出量は減ったが、分別の意識は低くなったようで、どちらがいいのかわからない。

燃やせないごみの処理について

いろいろなごみがあるが、プラスチック製品が多い。安い商品をムダに買ってしまい、いらなくなったようなものが多いと思う。リサイクルプラザで粉碎処理され、区分ごとに分けられるが、なんだかすっきりしない。

食べ物ごみのリサイクルなど

食べ物で考えると、日本は58%くらい輸入に頼っている。ということは、3分の2は外国の農地からのものである。食べ物ごみを考える = (イコール) 食べ物由来のし尿について・・・し尿のリサイクルを考える必要があるのではないか。現在、人のし尿や厨芥（台所から出る野菜くずや食べ物の残りなどのごみ）は燃やされて、セメントやスラグになっているので、農地にはほとんど戻らない。鉄は人の重要な栄養素。有機農業だと鉄分が多いものができるらしい。有機物は土に戻して農作物を作るのがいちばんよい。

また、ごみを燃やすときに水分があると、蒸発熱を奪うので、補助燃料がたくさんいる。特に生ごみの水を切ることはとても大切なことだと思われる。

ごみ問題を考える・・・分別するとき、分けるのと分けないのなど細かいことを含めて、どちらがすっきりしてますか？ということ。

【リサイクルプラザ見学】山口市リサイクルプラザ 岩本さん



山口市リサイクルプラザの岩本さんから説明を受けながら、施設内を見学しました。



缶はまとめてつぶしてブロック状にして保管

持込されるごみを見てみると、新品同様のものが多い。安くて買ったけれど使わなかったものなど。買い物するときにムダなものを買わないように気をつけてほしいと思う。ごみの約13%がリサイクルセンターで資源化ごみとして前処理している。

プラザ内には50人の職員中、市職員が13人であとはシルバー人材センターの方が働いている。アルミ缶・スチール缶をまとめる工程で、スプレー缶などが混ざっているのを、人手で分別チェックしている。



プラスチック製容器包装も機械でまとめてブロックにする。「自動ぐるぐる巻き機」(?)

ブロック状に固めたごみを機械でラッピングされていくところを見せてもらった。見事にぐるぐる巻き。



紙製容器包装～紙パック、牛乳パック、雑紙、新聞紙は別々。ここでも人手で再チェック、再分別されている。「紙ひもでしばってください」となっているが、しばってこなかったり、

紙ひもでないものでしばっている場合もあるので、シルバーの方が親切で紙ひもを用意してある。新聞紙など、「なぜ燃えるものを燃やさないのか？」・・・「リサイクル」とは再利用という意味だが、新聞はまた新聞になったり、「形を変えてもういっかい使う」ということだと思うので、燃やさないでリサイクルしたほうがいい。



捨てられた電池を
保管している
ドラム缶たち

【講義】 山口市のごみ事情 山口市資源循環推進課 田中光明主幹 別紙資料参照



山口市で出る資源ごみの処理量と処理費などについてお話いただいた。

山口市では資源ごみを出してもらうとき、11種類に分けてもらっている。(缶をアルミ、スチールに分けると12種類)スチール缶は磁石にくっつけて分別、アルミ缶は磁力で飛ばして分別することが出来るので、混ぜて出されても分別が可能。紙製容器包装はいろいろなものがあり、プラと紙が混ざっているものでも紙の部分が多ければ、紙製マークがついているし、銀紙がついていたりするので、処理するのにお金がかかる。中間処理センターでは銅、ステンレスが分別できないので、「金属・小型家電製品」の項目に加えた。分別をきちんとすることにより、不燃物等の埋立ごみが減った。(土砂が多らしい)

資源ごみを処理するとき、処理が大変なものはお金を払って処理してもらうが、ほとんどのものが資源物として売ることができ、平成21年度は約1億円の収入になった。平成22年度はこのままいくと約1億1千円の収入が得られる予定。

分別して出す方の市民にしてみれば、「資源ごみ」でしかないが、資源として売れるもの。「捨てればごみ、分ければ資源」ということ。

【感想】

講演時間が少し足りなかった。内容は山口市と宇部市のデータを比較しながら、数値で示した資料があり、とても分かりやすい説明をしていただいた。山口市の資源循環推進課の方の話も資源物を出してからどうなるのかと、実際の山口市の資源物の処理量と処理費に関しての具体的な話だったので、興味深く聞くことが出来たと思います。施設内を見学してから話をまた聞くというのも実感がわいて、講座の流れとしてはとてもよかったです。こういう形態で他の市町でも行いたいと思いました。

(アンケート) 別添のとおり